

冠詞は何を表わしているか
— 意味論と語用論のはざままで —

京都大学人間・環境学研究科
東郷雄二

1. はじめに：定/不定とは？

冠詞を持たない言語である日本語の話し手にとって、冠詞は習得の難しい文法項目である。また文法書などにおいても、冠詞の表わす意味を詳しく解説しているものは少なく、多くは用法の列挙に留まっている。一例として松浪有他編『大修館英語学事典』の解説をあげてみよう。

(1) 定冠詞の用法

a. すでに言及してある名詞について

John bought a TV and a radio, but he returned *the radio*.

b. 名詞を特定する修飾語が後置されている場合

John returned *the radio* he bought yesterday.

c. この世に唯一存在するものや種族

the earth, the world, the human race, etc.

d. 社会的共有物・機関

the television, the news paper, the train, etc.

e. 種族を表わす言い方

The tiger is a fierce animal.

(2) 不定冠詞の用法

a. one の意味を持つもの

Wait *a minute*.

b. ある種族の1個体であることを表わす。

I need *a ruler*.

c. 種族の代表として総称的に用いられる場合

A tiger is a fierce animal.

d. 配分的意味を持つもの

She writes to her mother once *a week*.

しかし、このような用法の羅列では、冠詞が表わすとされている「定・不定」が言語学的に見て何を意味するのか不明である。

また、不定冠詞は談話に初めて登場するものに、定冠詞は二度目以降に用いると説かれることもある。ところが Du Bois (1980) の英語コーパス調査では、613の初出名詞句のうち、34%が定名詞句であったという。人を除いて事物をさす名詞に限れば、467のうち41%が定名詞句であるという結果が報告されている。初出名詞句に定

冠詞が用いられる割合は予想をはるかに超えて多く、そのなかには(1)で示した定冠詞の用法では説明できないものも多数ある。

また不定名詞句は後続談話で定名詞句・定代名詞で照応するとされているが、次の(3)の例では照応ができない。ところが(4)のように文を変えてやると照応が可能になる (Karttunen 1976)。

(3) a. You must write *a letter* to your parents. *They are expecting **the letter**.

b. John forgot to write *a term paper*. *He cannot show **it** to the teacher.

(4) You must write *a letter* to your parents. **It** has to be sent by airmail. **The letter** must get there by tomorrow.

このような事実が示唆しているのは、冠詞の問題は単なる名詞限定のレベルに留まるものではなく、談話における名詞句の指示対象の提示・導入と、談話全体を通じて行なわれる指示の追跡 (reference tracking) の問題として捉えなくてはならないということである。

本稿では以上のような立場に立って、冠詞の機能を名詞句のレベルではなく、話し手と聞き手の相互行為としての談話構築という観点から考察する必要性を示したい。ただし本稿の限られた紙幅では冠詞全体について論じることはできないので、特に定冠詞に限定して考察することにする。

2. 定冠詞の機能

定冠詞の機能について現在までに提案された説を概観し、問題点を指摘する。

2.1. 唯一物説 (uniqueness theory)

まず定冠詞は唯一の指示対象を指すとする説である。この考え方は Russell (1905) のイオタ演算子にさかのぼる。

(5) *The professor is drunk.*

x [professor (x) \neg y (professor (y) x y) drunk (x)]

(There is an x such that x is a professor, and there is no professor y such that y is not x , and x is drunk.)

しかし何の限定もなくこれを適用してはこの文は真とはならない。この世界には教授はたくさんおり、また酔っばらっている教授もたくさんいるからである。この文が適格になるには次のような文脈が必要である。

(6) We went to the party held at King's College last night. There were one professor and ten students in linguistics. *The professor was drunk.*

このように文脈によって作り出された世界を談話世界 (universe of discourse) と呼び、談話世界に含まれる個体の集合を個体領域 (domain of individuals) と呼ぶ。(6) の

個体領域に含まれる professor はただ一人であり、このとき唯一性条件は満足される。このような文脈による領域限定を考慮して、Hawkins (1991) は次のように考えた。

- (7) *The* conventionally implicates that there is some subset of entities, {P}, in the universe of discourse which is mutually manifest to Speaker & Hearer on-line and within which definite referents exist and are unique.

話し手と聞き手が共有する個体領域 {P} を設定し、その領域内で *the* は唯一の存在をさすというのである。これを Theory of localization と呼ぶ。

この説のなかで Hawkins が提案している話し手と聞き手に共有された個体領域という点は正しい。ただし「唯一」という点に依然として問題が残る。次の古典的例のように、「河岸」はふたつあるが *the* で指されており、唯一説が成り立たない例があるからである。

- (8) "Still more strange is the sentence : *towards evening we came to the bank of a river.*
Every river on earth inevitably has two banks. Here, however, only *the* is possible..."
(Christophersen 1939)

2.2. familiarity 説

次は定冠詞は聞き手にとって旧知 (familiar) なものを指すとする説である。この代表格は今引用したばかりの Christophersen である。ここではこの立場に立つ Heim によるまとめを引用しておく。しかし、(8)の *the bank of a river* の例を見てもわかるように、「聞き手に旧知」という説明は強すぎて妥当性を欠く。

- (9) "The most influential traditional attempt to answer this question was Christophersen's (1939) 'familiarity theory of definiteness', according to which the essential function of definiteness is to signal that the intended referent of an NP is a referent with which the audience is already familiar at the current stage of the conversation." (Heim 1982)

2.3. identifiable 説

定冠詞が表わす意味は、名詞句の指示対象が「同定可能」(identifiable)とする説である。これは familiarity 説を若干弱めたものと考えてよい。旧知ではなくとも、文脈や発話状況から指示対象を同定することができればよいとする考え方である。この説を支持する人は多いが、ここここではふたつだけ例をあげておこう。

- (10) "The definite article has no content. It merely indicates that the item in question is specific and identifiable; that somewhere the information necessary for identifying it is recoverable. Where is this information to be sought? Again, either in the situation or in the text." (Halliday & Hasan 1976)

- (11) 「定性とは問題になっている名詞の指示対象を聞き手は唯一的に同定してい

る (uniquely identify) はずだと話者が考えているかどうかを表わす概念である
と言い換えておきましょう」(石田 2002)

しかし、次の定名詞句の指示対象は果して聞き手にとって「同定可能」だと言える
だろうか。

- (12) a. She went to a restaurant and asked *the waiter* for *the menu*.
b. Every time I go to the clinic *the doctor* is someone different.
c. It's hot here. Open *the window*.
d. George ! Beware of *the dog* !
e. [Nurse entering operating theatre] I wonder who *the anaesthetist* is
today. (Lyons 1999)

a. では *the waiter* は最初から定であるが、「聞き手にとって同定可能」と言えるだろ
うか。この例ではおまけに唯一性条件も破られていて、問題のレストランには何人
ウェイターがいてもこの文は適格である。b. の *the doctor* は私が病院に行く度に異な
るのであるから、どの医者かを同定することは原理的に不可能である。また病院に
何人医者がいってもかまわない。c. では部屋に複数の窓があってもよく、聞き手はど
の窓をあけてもよい。このとき *the window* が同定可能と言うことは難しい。d. の警
告は聞き手からは犬が見えていなくても成立するが、このとき聞き手はどの犬かを
同定することはできない。e. は埋め込み疑問文であるが、*the anaesthetist* はそもそも
指示的用法ではなく、個体同定そのものが問題にならないのである。

以上の点を考慮すると、*identifiability* 説にも重大な問題があると言わざるを得な
い。

2.4. 存在前提説

定冠詞 *the* はもともと直示的指示詞の *that* が音韻的にも意味的にも弱化したもの
だと言われている。フランス語でも事情は同じで、ラテン語の指示詞 *ille* が弱化し
たものである。直示的指示詞は文字通り何かの対象を指す機能を持つのだが、定冠
詞に変化する過程で指示機能も弱まり、遂には存在前提 (*existential presupposition*) し
か持たなくなったとする説である。この説の代表は Ducrot (1972) だろう。

- (13) "...l'emploi des descriptions définies pour la désignation est tout à fait secondaire — et
presque occasionnel —, alors qu'elles comportent d'une façon quasi constante des
indications existentielles. L'emploi désignatif n'est caractéristique, selon nous, que des
noms propres et des démonstratifs..." (Ducrot 1972)

「確定記述の指示的用法は二次的なものであり、偶発的なものと言ってもよ
い。一方、確定記述はほとんど常に対象が存在するという意味を伝える。私
の考えでは、指示的用法は固有名詞と指示詞に限られる。」

2.5. まとめと本稿の立場

本稿では最後に挙げた「存在前提」説に依拠する。定冠詞には対象を積極的に指すという指示機能はなく、the N で表現される名詞句の指示対象がある領域に「存在するはずだ」という前提を聞き手に伝達すると考えることにする。

すると問題は少なくともふたつある。ひとつは指示対象が存在する「領域」をどのように規定するかという問題である。(5)(6)で見たように、指示対象は文脈的に限定された談話世界に含まれる個体領域に存在する。この点を何らかの形で表現する必要がある。

もうひとつの問題は、存在前提は言語的前提が一般にそうであるように、明示的に表現されるというよりは、非明示的に含意されるという点に存する。前提は談話の中では暗黙の了解として働くのであるから、定冠詞の機能を説明するためには、話し手と聞き手が談話のその時点で暗黙のうちに了解していることを表現してやらなくてはならない。

このふたつの点を表現するために筆者が数年前から開発しているのが、次節で述べる「談話モデル理論」である。

3. 談話モデル

3.1. 談話モデルとは？

まず談話とは何かを定義しておきたい。

- (14) 談話とは、話し手と聞き手の相互行為 (interaction) を通じて、時系列に沿って、局所的に構築される、累積的な (incremental) 心的表示 (mental representation) である。

次に談話モデルの概要を示す。詳細は東郷 (1998, 1999, 2000, 2001, 2002) を参照していただきたい。談話モデル (Discourse Model) とは、話し手と聞き手の双方が保持し、談話の構築にあたって発動される心的領域である。この心的領域は、談話の指示対象 (discourse referent) とそれに関する情報が格納される一種のファイルシステムである。談話モデルは次の部分領域からなる。

- a. 共有知識領域 Shared Knowledge
 - a-1. 百科事典的知識 Encyclopaedic Knowledge
 - a-2. 個人的エピソード記憶 Personal Epsodic Memory
- b. 発話状況領域 Context of Use
- c. 言語文脈領域 Linguistic Context

共有知識領域に格納されているのは、次のような名詞句の指示対象である。

- (15) a. *Columbus* discovered America in 1492. [固有名]
b. *The earth* goes around *the sun*. [唯一物]
c. Have you heard of *Paul*? [個人的記憶]

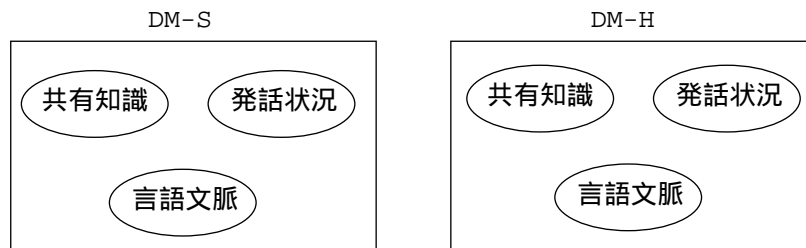
発話状況領域はデフォルトで話し手と聞き手と発話状況を含み、次の名詞句の指示対象が把握される領域である。

- (16) a. [指さしながら] Pass me *that hammer*.
 b. [部屋に入って来た人に] Shut *the door*.

最後に言語文脈領域は、談話の始発時には空であって、談話の進行とともに指示対象が登録されてゆく領域である。たとえば次の例では、不定名詞句 *a wizard* によって新たに言語文脈領域に指示対象が登録され、照応的 *the wizard* はこのように登録された指示対象をさすことができる。

- (17) There lived a wizard and a witch in Africa. *The wizard* had a son.

談話モデルは次の図のような基本形をなしている。DM-Sは話し手側の談話モデルを、DM-Hは聞き手側の談話モデルを表わす。談話は基本的にはDM-SとDM-Hの調整過程と理解される。



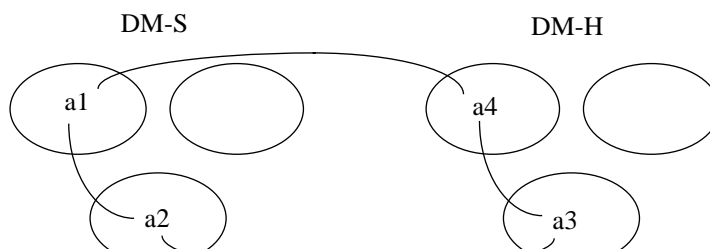
談話モデルの諸領域に登録されているものは、話し手・聞き手が「知っている」ことに相当する。従って談話モデルは、話し手・聞き手の知識状態をファイル形式で表現する。文のなかで用いられた定名詞句などの指示表現は、談話モデル内に登録された discourse referent をさすと理解される。

それではかんたんな例を用いて談話モデルの働きを見てみよう。同一の話し手が聞き手によって異なる指示表現を使うことがある。次は自宅で飼っている Tom という猫がいなくなったという設定での発話である (Galmiche 1989)。飼っている猫は一匹しかいないと仮定する。

- (18) a. [妻に] Didn't you see { *the cat / Tom* } ?
 b. [近所の人に] Didn't you see *my cat* ?
 c. [通りがかりの知らない人に] Didn't you see *a cat* ?

なぜ聞き手によって異なる指示表現を用いるのかは、次のように表わすことができる。まず妻に向けての発話 a. から見よう。

- (19) [妻に] Didn't you see { *the cat / Tom* } ?

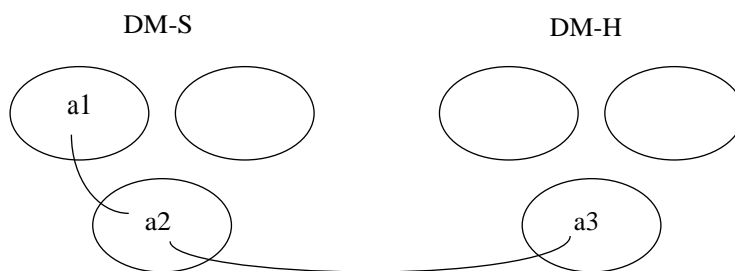


a1は話し手の共有知識領域に登録されているTomをさす。話し手は発話することで the cat / Tom の指示対象を自分の言語文脈領域に a2 として登録する。a1とa2は同じものなので、両者は同一性コネクタで結ばれている。聞き手は発話を聞いて、a2と同じものを自分の言語文脈領域に a3 として登録する。指示表現は定名詞句 / 固有名であるから存在前提を持つ。聞き手は a3に対応する対象を自分の共有知識領域に探索に行く。すると共有知識領域内に a4 が見つかる。これは自分が前から知っている Tom といふ飼猫であり、a1と同一物であるので、すべては同一性コネクタで結ばれ、発話は正しく処理される。

発話者である私と妻は語用論的前提を高度に共有している。この状況において、the cat という定名詞句や Tom という固有名は、両者の共有知識領域に登録済みの対象をさす。逆に言うと語用論的前提の共有が、定名詞句や固有名の使用条件だということになる。

紙幅の都合で Didn't you see my cat ? の解説は省略し、不定名詞句を用いる場合を見てみよう。このとき談話モデルの図式は次のようになる。

(20) [通りがかりの知らない人に] Didn't you see a cat ?



話し手は共有知識領域に登録されている Tom を表わす a1 を、発話することで言語文脈領域に a2 として登録する。ただし用いる指示表現は、a cat という不定表現である。この a2 はただちに聞き手の言語文脈領域に a3 として登録される。a cat は存在前提を持たないので処理はこの段階で停止する。聞き手は自分の共有知識領域に a3 に該当する対象を探索に行く必要はない。a cat は「自分が知らない猫」を表わすからである。

定冠詞と不定冠詞の意味を次のように手続き的に記述することができる。

定・不定の談話モデルによる定義

- 不定名詞句 an N は、DM-Hに登録されていない指示対象を、DM-Hの言語文脈領域に新たに登録せよという意味を表わす。
- 定名詞句 the N は、DM-Hに登録済みであるか、もしくは共有知識領域から引き出された認知的フレーム内に存在する指示対象を同定せよという意味を表わす。
- 直示的表現 (ex. this, これ) は、発話状況領域に存在する指示対象を同定せよという意味を表わす。

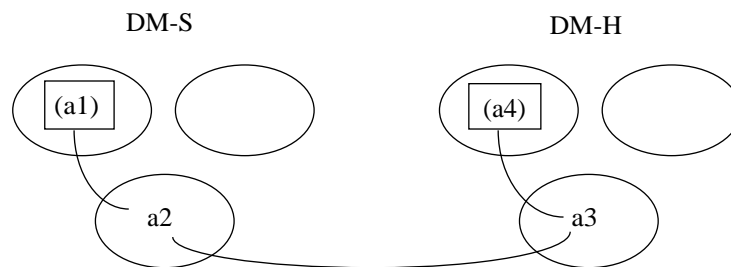
3.2. 複数の領域にまたがる double grounding

すぐ上に挙げた定義のなかで、b. には「認知的フレーム内に存在する指示対象」という文言が使われていた。これは一般に連想照応 (associative anaphora) と呼ばれる現象を処理するための規定である。連想照応とは次のような現象を言う。

- (21) a. I got on a bus yesterday. *The driver* was drunk.
b. She went to a restaurant and asked *the waiter* for *the menu*. (= 12a.)
c. Every time I go to the clinic *the doctor* is someone different. (= 12b.)

a. では a bus と the driver とは「バスには運転手がいる」という連想関係にある。このとき the driver にはたとえ初出であっても定冠詞が用いられる。

この連想関係を処理するため、私たちの共有知識領域には経験に基づく「認知フレーム」(cognitive frame) が登録されていると考える。「クリスマスのフレーム」「結婚式のフレーム」のようにテーマ別に分類されていて、フレームにはデフォルト要素があらかじめ存在する。「クリスマスのフレーム」ならば、「クリスマスツリー」「サンタクロース」「プレゼント」などがデフォルト要素である。(21) a. の例では「バスのフレーム」にはデフォルト要素として「運転手」が存在する。これを談話モデルを用いて次のように表現しよう。



DM-S内の四角は「バスのフレーム」を、(a1) はフレームに含まれている「運転手」を表わしている。同じフレームは聞き手のDM-Hにも存在する。話し手は I got on a bus yesterday. という発話により「バスのフレーム」を喚起する。次に The driver was drunk. に含まれた定名詞句 the driver により言語文脈領域に a2 を登録するが、これはバスのフレームに含まれた a1 とコネクタで結ばれている。a2 はただちに聞き手の言語文脈領域に a3 として登録される。問題はここからであるが、聞き手は a3 が存在前提を持つためその指示対象を自分の共有知識領域に探索しに行く。その指示対象は直前の発話によって喚起された「バスのフレーム」にデフォルト要素として含まれている a4 に合致すると判断され、聞き手は「話し手が昨日乗ったバスの運転手」という正しい理解に到達する。

このようにして認知フレームにデフォルト要素として含まれている対象もまた、談話モデル内において存在前提を持つと見なすことができるのである。

こう考えれば、上の (21) b. (= (12) a.) の例は説明できる。この例は聞き手が本当にその指示対象を「同定」できるかどうか疑問な例として出されていた。そのなかで (12) a. の the waiter は、a restaurant the waiter の連想関係に基づいて、レストラン

のフレームにデフォルト要素として含まれたウェイターと理解できるのである。

しかしながら認知フレームという考え方を採用することで定冠詞が使われることは説明できても、なぜ唯一性条件が解除されるのかがこれでは説明できない。(12)a. では問題のレストランに何人ウェイターがいても文は成立するのであった。この謎を解決するためには「同定の深度」という概念が必要になる。

4. 同定の深度と「関数的存在」 Functionals

Fraurud (1996)は次のような名詞句の指示対象をめぐる存在論を提案した。

(A) **Individuals** : 最も個性が高く、典型的には固有名。Who ? / Which one ? という疑問の対象となる。最も深度の深い個体同定を要求する。

例として *Charlie Muffin tried to prove his innocence.* をあげると、固有名 Charlie Muffin は、小説などにおける特殊な修辞を除いては、Charlie Muffin が誰かを知っている必要があるという意味で深度の深い個体同定を要求する。

(B) **Functionals** : 単独では存在できず、他の anchor との関係でその存在が把握される。Whose ? / Of which ? という疑問の対象となり、関係を手がかりとした浅い同定しか要求しない。

ex. the postman [of a certain district] [at a particular day]
the mother [of someone]
the author [of a book]
the carburator [of a car]

「郵便配達人」は「どこかの地区」と「特定の日」と相対的に規定される。また「母親」という絶対的存在はこの世にはない。母親とは常に「誰かの」母親である。これらの名詞は関係名詞 relational nouns と呼ばれることもある。

(C) **Instances** : カテゴリーの一成員としてのみ把握され、個体同定を必要としない。

What ? というカテゴリー帰属を尋ねる疑問の対象となる。

ex. What is this ? — This is a *palm tree*.

冠詞との関わりで考えるならば、Individuals は固有名詞 (無冠詞)・定冠詞の領域であり、Functionals は定冠詞の領域、Instances は不定冠詞の領域である。ここで特に注目したいのは Functionals である。ここでは仮に「関数的存在」と訳しておく。関数的存在の特徴は、他のアンカーとなる存在との関係において把握される存在であるため、アンカーが先行した場合、常に定冠詞を伴って出現するという点にある。

(22) John can't use his car today. {*The carburator* / **A carburator* } broke down.

このとき関数的存在に付く定冠詞 the は、(his) car が開くフレーム内に存在前提を持

つことを示すマーカーとして機能している。だから不定冠詞を用いて a carburator としてしまうと、(his) car が開くフレームとの関係が断ち切られて不適格となる。

関数的存在のもうひとつの重要な特徴は、個体同定 (Which one ?) に至らない浅い同定で十分であり、対象の唯一性を要求しないという点である。次の例の la fille は典型的な関数的存在であり、ジャンに娘が何人いても適格な文である。

- (23) A : Qui est cette étudiante ? (Who is that student?)
B : C'est la fille de Jean . (She is John's daughter.)

次の例では、この地区を担当する郵便屋さんが何人いてもよい。またテーブルには4つ角があるが、個体差がないため唯一性の制約は解除される。

- (24) a. Has the postman already passed ?
b. I hit my head against the corner of the table.

ここで「浅い同定」という用語を用いたが、これは 2.2. 節で批判した identifiability 説で用いられた「同定」という用語とは異なる意味で用いていることに留意されたい。identifiability 説で用いられた「同定」とは、Which one ? という質問に答え、場合によっては指さして示すことができる個体同定を意味している。しかしここで用いた「浅い同定」はそのような意味ではない。たとえば「浅見さんの娘が近々結婚するそうだよ」という発話は、私が浅見さんを知っていればよく、浅見さんの娘と面識がなくて、浅見さんに何人娘がいるかを知っていなくても理解可能である。「浅見さんの娘」という名詞句の指示対象は、浅見さんをアンカーとしてその関係において把握される存在であるから、私はその娘を個体同定できる必要はないのである。

5. 領域の限定と存在前提の調節

依然として次の例 (25) は説明できないまま残っている。前節で扱った例とは異なり、この例には認知的フレームのトリガーとなる要素がないからである。

- (25) George ! Beware of the dog ! (= (12) d.)

またこのようなケースでは、不定冠詞や指示形容詞は適切でなく、定冠詞のみが適切であることが知られている。

- (26) [通りを横断中の人に自動車が後ろから急接近している状況で] a.
Attention à la voiture ! (Beware of the car !)
b. ??Attention à une voiture ! (Beware of a car !)
c. ??Attention à cette voiture ! (Beware of that car !)

これはどのように説明できるだろうか。名詞 voiture は初出なので不定冠詞が適切のように思えるが、事実はそうではなく定冠詞を用いる。また発話現場にある自動車

をさすのだから指示形容詞が使えるように考えられるかもしれないが、これも予想に反して不適切である。

このような用法は定冠詞の「現場指示的用法」あるいは「外界照応」(exophora)と呼ばれている。この用法について池内(1982)は次のように述べている。

「この用法は、the + 名詞の指示物を同定すべき話者、聴者共有の知識集合が、言語文脈によってではなく、発話の場面、周囲の状況、そして、話者、聴者を取り巻く社会的文化的政治的環境によって形成されている場合である。(...)

[例 Don't go in there, chum. *The dog* will bite you. について]

話者は、聴者には見えない、聴者が全然知らなかった犬の存在を(89)[上例]によって知らせることができるのである。要するに、話者、聴者を取り巻く直接的発話場面が共有知識集合の役割を果たしているのである。」(下線は東郷による)

共有知識集合の形成を定冠詞の使用条件としているところは、談話モデル理論と共通しているが、この説明にはおかしな点がある。池内は「直接的発話場面が共有知識集合の役割を果たしている」としているが、聞き手が犬の存在に気が付いていないとき、話し手側の知識集合には「犬」は存在しているが、聞き手側の知識集合には「犬」は存在していないからである。このようにずれがあるものを「共有知識」と呼ぶことはできない。この例を説明するには、「領域の限定」と「前提の調節」という概念が必要になる。

George! Beware of *the dog*!、Attention à *la voiture*!などは「現象文」と呼ばれている(佐治 1973, 坪本 1992)。ここでは詳しく述べる余裕はないが、現象文は発話の場に基盤を持つ文タイプであり、指示対象の存在領域が発話の場に限定される。これにより、*the dog*, *la voiture* の存在領域は限定され局所化される。これが第一の条件である。

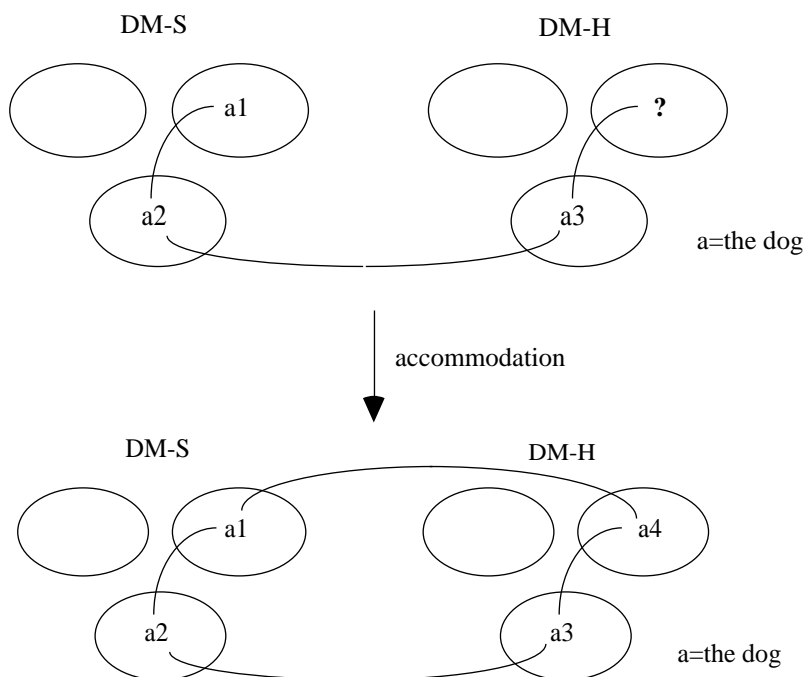
次に前提の調節であるが、Lewis (1979) の定義を引用しておこう。

Accommodation of presupposition

"If at time *t* something is said that requires presupposition *P* to be acceptable, and if *P* is not presupposed just before *t*, then - *ceteris paribus* and within certain limits - presupposition *P* comes into existence at *t*."

これにより、Beware of *the dog*! の協調的聞き手は、文が真となるように前提の調節を行なう。知識状態を更新し、それまで存在前提を持たなかった *the dog* に新たに存在前提を与えるのである。だから聞き手にとって、*the dog* は更新された知識状態において存在前提を持つ対象にすぎないのであるから、それはBeware of *the dog*! という発話を引き金として、いわば仮構的に設定された「現場にいるはずの犬」であり、個体同定をすることはできないし、その必要もないのである。

前提の調節を談話モデルを用いて描くと次のようになる。



上の図は調節前の聞き手の知識状態を表わす。a3= the dog の指示対象は DM-H の共有知識領域にも発話状況領域にも登録されていない。聞き手は *Beware of the dog!* が現象文であることを理解し、前提の調節を実行して自分の発話状況領域に the dog の指示対象を a4 として登録する。

定冠詞の意味を「指示」や「既知」(familiarity) や「同定可能性」(identifiability) とするのではなく、談話モデル内での存在前提を表わすと考える利点はここにも明らかである。なぜならばもし定冠詞が指示機能を持つとしたら、Lewis 流の「前提の調節」を行なうことはできないからである。指示は前提と同じものではない。一方、定冠詞の意味を存在前」とすることによって前提の調節が可能になる。定冠詞はこのように、話し手と聞き手の双方の知識状態を、前提の調節を行なうことによって相互理解が可能な状態にアップデートするための道具だと考えることができる。談話というものを、話し手と聞き手の相互行為と見なすゆえんである。

この前提の調節は、小説などのフィクションで文体的効果を得るためによく用いられている。次はある小説の冒頭の一例である。

(27) Six heures, **le** réveil sonne dans **la** chambre de Peggy Schneider. Elle se lève, prépare **le** café, pose **le** pain, **le** miel et **la** confiture sur **la** table de **la** cuisine.

「6時にペギー・シュネデルの寝室で目覚まし時計が鳴る。彼女は起きあがり、コーヒーを淹れ、台所のテーブルにパンと蜂蜜とジャムを置く。」

日本語訳で下線を引いた部分に定冠詞がついている。この定冠詞はすべて前提の調節を意図して用いられている。読者は小説の「協調的な読み手」として振る舞う限りこの前提を受け入れて、「目覚まし時計」や「コーヒー」を描写された現場に「あるもの」として存在前提を付与する。このようにして小説家は効果的に虚構世界を

作り上げるのである。

【参考文献】

- Christophersen, P. (1939) *The Articles : A Study of Their Theory and Use in English*, Munksgaard.
- Du Bois, J.W. (1980) "Beyond definiteness : the trace of identity in discourse", W. L. Chafe (ed.) *The Pear Stories : Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*, Norwood, Ablex.
- Ducrot, O. (1972) *Dire et ne pas dire*, Hermann.
- Fraurud, K. (1996) "Cognitive ontology and NP form", T. Fretheim & J. K. Gundel (eds.) *Reference and Referent Accessibility*, J. Benjamins.
- Galmiche, M. (1989) "A propos de la définitude", *Langages* 94.
- Halliday, M.A.K. & R. Hasan (1976) *Cohesion in English*, Longman.
- Hawkins, J.A. (1991) "On (in)definite articles : implicatures and (un)grammaticality prediction", *Journal of Linguistics* 27.
- Heim, I. R. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun phrases*, Ph.D. thesis, University of Massachusetts.
- Karttunen, L. (1976) "Discourse referents", McCawley, J.D. (ed) *Syntax and Semantics* 7, Academic Press.
- Lewis, D. (1979) "Score-keeping in a language game", Bauerle et al. (eds) *Semantics From a Different Point of View*, Springer Verlag.
- Lyons, Ch. (1999) *Definiteness*, Cambridge UP.
- Russell, B. (1905) "On denoting", *Mind* 14.
- 池内正幸 (1985) : 『名詞句の限定表現』 (新英文法選書第6巻) 大修館書店.
- 石田秀雄 (2002) 『わかりやすい英語冠詞講義』 大修館書店.
- 佐治圭三 (1973) 「題述文と存現文」 『大阪外国語大学学報』 29.
- 坪本篤朗 (1992) 「現象 (描写) 文と提示文」 『文化言語学 : その提言と建設』 三省堂.
- 東郷雄二 (1998) : 「談話モデルと指示」 『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』 文部省科学研究費成果報告書 (基盤研究 (C) 課題番号07610492)
- 東郷雄二 (1999) : 「談話モデルと指示 — 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」、 『京都大学総合人間学部紀要』 第6巻.
- 東郷雄二 (2000) : 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」 『京都大学総合人間学部紀要』 第7巻.
- 東郷雄二 (2001) : 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」 『フランス語学研究』 第35号.
- 東郷雄二 (2002) : 「定名詞句の「現場指示的用法」について」 『京都大学総合人間学部紀要』 第8巻.
- 松浪有他編 (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店.